

西 册

Tourenbericht

7

都立西高OB山岳会

山 行 計 画

27 北 岳 7月17日～20日 L 田中(実)

28 谷川岳マチガ沢

7月24日 L 平沢

29 夏山合宿 迷指標 田中(実)

A 日馬一針木一剣 8月8日～22日 L田中(実)

B 慈高一薬師一剣 8月9日～22日 L平沢

C 剣(秋名-宇奈月) 8月17日～22日 (L未定
係長崎)

8月19日までに全隊駒沢に集結

30 雲取山集中 9月24～25日

武州側 道上谷、犬友谷、悪谷、大京谷(滝谷)

己戸谷、厚松谷、大雲取谷、長沢日影谷

甲州側 青岩谷、龍喰谷、小常木谷

新たな年に寄す

本年度初合宿を終つて

平 沢 勇

本年度の初合宿とは即ちチーフリーターな交代し山行方針な及び過去二年間の沈滞を打破るべき清新且氣暢に満ちた山行であるべきであつた。

商るに結果として得られたものは何であつたか。それは会長の推薦によるオ一回の正会員選出が全く公正であつたことの証明以外の何ものでもなかつた。正会員数とそれに就くべき者との印の凡る意味に於ける爽力の差を痛感せしめられた次才である。正会員候補が少しはかりの凡雨に天幕の管理も出来ず、又少々の風に萎縮して遅れる隊員を助すどころか自分のことのみ汲々としている有様では情ないと思はれる。原因はすべてアルピニズムの不理解と云う点に歸着せしめることな出来ると思ふ。

(1) 私は今更アルピニズムについて云々したくない。既に知られているべきことを再び口にするのは失礼であることを知っている。むしろ私の本心としては云いたくないのである。併し忘れてはならない事がある。それは我々の会が何気なくアルパインクラスになつたのではないと云う事だ。云いかえれば先にアルピニズムと云う抽象的なものなあつて、それに同調する者な集つて形を成したのか花々の会なのであり、従つて我々の会の会員はアルピニズ

ムを多少なりとも理解し或はそうありたいと希う者であることは一つの前提として考えて良い事なのだ。もつと分りやすく云えばアルピニズムを理解していると云う事は会員としての條件なのである。

我々の山行は少くともその前提によつて行つて来たつもりであるが今回の合宿に於てその事実を示すものを見出し得なかつたのは甚だ遺憾であつた。そこで私としては意忠に反することではあるが新会員も増えた今この機会に皆のアルピニズムに対する再認識を奨励し皆の反省を求めたいと思ふのである。

登山をすること各人の生活の中でどの様な意味を持つのか、それは個人の向きであつて云々すべきことではない。しかし現在自分がそれを行つている事実は価値を認めることの証明に相違ない。ところでその価値だがアルピニズムに立脚しての登山の価値は各個人がその能力を伸展させる点にあることを知らねばならぬ。アルピニズムの登山は頂上へ登るとか景色が良いか云々様な利便的なものを求めるものではない。これ等は単に副産物に過ぎず我々の求めているものは、自分なのだ。昨日より進歩した

自分を自覚した時それな善むでありそれな我々の求めていたものである。進歩を求めるとき、現在の自分を越える時苦しいと感ずるのは当然の事と云わねばならない。その苦しみを避けてこそ善むがあるのではないのか、苦のない所に樂はない。苦と樂は相反するものだがその矛盾があつて初めて事物の（相対的な）存在が許されるのである。矛盾のない所に進歩はない。

我々の登山も常に矛盾するものかなければならぬ。一つの苦が樂になつた時、それは新しい苦に転ずるものでなければならぬ。今日は昨日故の今日であると同時に明日の爲の今日なのである。現在の自分に完成を感じた時その自分はもう終りなのだ。常に進歩を求める事がアルピニズムの本質なのである。

これに異論があるものには早速に退会を勧告したい。何故ならその存在は無意味だからである。

ハイキングにも意味はあるだろう。だが登山を生活の一部と考へ（各人の許す範囲内で）登山に最善の努力を尽すことはもつて意味がある。

会が単なる個人の集會ではなく一つの有機体としての意味を持つことは云うまでもない。会の意味は同じ様な目的を持った者が目的に対して協力して努力すると云う處にある。我々の会は共通の目的として、「登山に於ける完成」を持ち、我々は互に協力してその目的に向つて努力しているのである。

ところが共通の目的はもつていても登山の様に幾分技術が介入し又多分に危険のあるものでは各人が同じ様な位置にいるわけに

は行かない。自然ある程度優れた者が指導的立場に立ち精神的技術的指導をしなければならぬのである。

我々の会は一応の指導者としての正会員は四名しか居ない（合宿に出たのは三人だ）しかし三人でも充分な指導が出来ると自信をもつて仙ヶ倉に臨んだのである。かそれは皆の努力を期待しての事であつた。各人によつて登山に対する條件が異つてゐるのは当然で我々はその条件を考慮しなから合宿を行つて来た。併しそれにもかかわらず努力が足りぬと云いたいのだ。私の考へとしては会員の意志を尊重したい。会の目的のために会員をしごく事をすつて会員自ら努力する事を欲したい。

目的を他に持ちながら遊び半分で合宿に来る事は私には異様に感ずるのである。

以上雑文になつたが集めるには反ばないとは云うものの会の現況を考へるとき、正会員の不足を痛切に感ずるので敢て一文を置いた次である。

下積の期間には必要であるがいつまでもそこに止れるものではない。会は永々に続くものである。登山の価値を認められた時先達者か後進の指導を心懸けるのは自分の登山と同様に必要な事である。自分を正視し会を正視しようではないか。

仙ノ倉谷基礎合宿

期日 五月一〜五日

P CL 田中 爽

SL 福田宏二郎

(SL)
平沢 勇
長崎 正邦

森沢 拓治

鈴木 禪夫

中野 采司

佐藤 信治

成瀬 泰雄

岩崎 元子

(抜備) 松田 朝夫

見里 朝規

渡辺 亨

西高部貞松田、北村

5月1日(雨)夜)

土樽(一三三〇〜一四一〇)―群馬大にユツテ(一五・二五)

五五)―BC(一七二〇)

田中、平沢、成瀬、松田、見里、渡辺の六名出発。朝から降りしきる雨である。土樽についた時は、あれ程の雨も嘘の様に晴れ上り青空さえ見える。駅でバック―人約六貫の荷である。雪解けで増水した魚野川が白く光って流れている。やがて鉄橋をわたり左手のシナの木原に入る。空は青く晴れ渡り正面に真白い仙ノ倉山が望まれる。疾雪を踏んで三時半群大山荘に着き

御茶を御馳走にひる。午後の晴を受けて万太郎山は白い。バックが平を横切り幕営地を求めて仙ノ倉谷の左岸沿いに湖る。渡渉する等数度、なかく幕営に適した所がない。平地らしい平地は殆んど雪で覆れている。タイコロシ沢の出合右岸に適当な場所を見つけ流置の多い沢を各へオソい渡渉して移る。テントを張り終った頃には既に陽は山の端にひかっていた。仙倉谷は沢の音だけを奏して暮れて行く。かまどから立昇る青い煙は谷に翔引き合宿オ―寮の幕は静かに下りる。

5月2日(晴)

BC(一〇・二〇)―昼食(一〇・二〇)―練習終了

(一三・〇〇)―BC(一三・五〇)佐藤入山

四時半起床。直ちに田中、平沢、成瀬は右岸の道つけをする。佐藤の到着を待ち八時出発イイ沢を登る。上部は担当スロツクが落ちていたか沢の勾配はゆるく明るい感じの平凡な雪渓である。右岸に大きなスラスか見える所で左岸の技沢に入りキツクステツフでぐんぐん登った後滑落停止訓練から始める。勾配は約三〇度として急ではないが流される者もある。短時間ではあるがみつちりしこかれて十時半昼食とする。昼食後はタリセードをするがスキー靴以外は決意に滑らない。最上御まで登ればやや感にはなるが雪が柔く殆どスピード感が出ない。とにかく滑ること確実にする事に重点を置き一時過練習を終り雪渓をかけた下り林間の疾雪を踏んでBCへ帰る。

5月3日(晴)雨(雨烈し)

(成瀬)

BC(0入00)ー一六五〇峰(一〇三〇)ー昼食(一一二〇)ー三五)ー引返し点(一一五〇)ーイイ沢コル(一一二五〇)ー一三〇五)ーBC(一一三〇四)

上空には巻層雲など低気圧近しを思わせる天気だ。福田、中野、鈴木を加えて一行十名となりルートをダイコオロン沢にとった。澤は真直ぐなので出合から少し入れば上部を見透すこと出来る。傾斜は緩く一鬼突当りの様に見える意に傾斜が急になる所で大きく左右に別れ左股はスラスとなつて稜線に突上げ右股は直角に曲込んで見えない。右股はその上でS字に屈曲し更に介れ我々は右股の右を登った。二股はクレバスの大きいのが三つ空いて居る。傾斜もマナガ沢等に比べれば同變なく稜線まで来たものであった。ところがこれから大渡一六五〇峰まで石楠花と熊世の素適なアシユにしこかれ、いささかモーロとしてピクに立った時音びの事も出ればこそ今度は猛烈な風にまともに立向うこととなった。一寸やせた尾根をたどるとシッケイ頭への登りとなる。ここが又いよいよアシユだ。頭は広い世原で天気でもよければ屋敷に快適だろうか今日はそれどころではない。三字頭の中途でやっと路らしきものに当たったがすぐ見失つてしまう。小さなピクを越えたところで熊の足跡と二人介のバテたアイゼンの跡を発見した。いよいよ最後の登りで風に吹かれながら昼食を摂った。いつの間にか天気はキリシオンに変わった。尾根は広くなり稜上間近らしくそれの必を頼りとして歩いた。ついに真白な峰に立った。先は下りとなつて

いる。飛ばされようになりながら鶴首会談を行ったな。ここからだか判らないが間違つても高だろうこの結論を得天候と照し合せて引返す事にする。下りは早い。シッケイの頭は向い風になつたので雪のカケラが目に入って痛くて困つた。イイ沢のコル送下りイイ沢を下る。

テントに帰つてタリソンの天幕を飛ばされてゐるのには驚いた。雨も降り出し居住性の悪いこと甚しい。中野、鈴木、藤原、夕食後天幕の後半を破られてしまふ。沢筋で天幕をやられるとは予期しなかつただけに仕方ない。撤収して六人用に入入った。夜に入つて風雨烈しくなり六人用もポールを折られイタク浸水されス濡れとなつた。(平沢)

5月4日(晴)

午前イイ沢にてタリセード。午後佐藤、成瀬、松田、鬼里、渡辺の五名下山。

(註・原稿に福田リ木君のため残念ながら割愛する)

5月5日(快晴)

岩所以下BC入り(六五五)ー出発(八〇〇)ーイイ沢ー稜線(九五〇)ー一〇〇五)ー三の次頭下・昼食(一〇五〇)ー一四五)ー仙の倉山頂(一一二五)ー一二三〇)ーイイ沢ツメ稜線(一一三)ー一BC(一一四)ー一四五〇)ー土樽取(一六〇〇)

最終日に至つて最も悪まれた天候が我々を迎えてくれた。日帰り班を迎えて例によつて八時BCを出発。この谷々にあつては初夏を思わせる様な太陽が、木々を通して強く指し込んでゐる。五日

向の雪解けとは思われない様に、ふきの屑は坊主頭を並べ昨秋の枯葉はかさかさと言ふ音させたてている。流れる水はあくまでも冷く、その水量を増々増してゐる。兎上げるイイ沢の雪面は強い太陽にザリザリとこらえ、且つ自らを失つてかく姿が痛ましい。落ちかかっているスコックも時行列と云つた塵梅である。日帰り班は乗越しを心配して一睡もしなかつたと云うが、彼等の夫われに斗志の助言ではあり得ない。MはBに残り、EとKの剣刀たるや夢遊病者にも等しい。前夜発が多い我々に反着して然るべき同盟であろう。交代のステップも彼等は波打を重ねるだけだから、氣力な唇をついた感じである。快晴と云ふ名目だけな私を安泰させていると云つて過言ではあるまい。三の次の頭手前の広場で昼食をとつた。一昨日の悪天を思い地獄極楽の差違を和氣あいあいのうちに笑つて過す一時であつた。万太郎がでない勇姿に、親分格を誇つてゐる。平塚山はその女性的なスロープをふつくらさせて、いかにも、もの静かな態度をぬせてゐる。Eと平沢と共に残して頂上に向つた。予想外の短時間で我々は頂上に立つた。Bと入りの白山頂を真白にした新雪は影すらなく世の葉ばかりが青々としてゐる。早々に下山。早足で降りて疲衰を引返した。イイ沢のツメでEとHに合流。くさり切つた斜面はトリセードの味こてなく、馳け足で飛ばす。今年の仙の倉谷はもう雪も落ちきつてしまつたこの合作さんのお話であつたか、なるほど心配されるところは、ほんとんどみられず、ただこわい雪の急斜面もかく春を静かに見守つてゐると云つた積である。二十五分間でBと敬

收五日間の仙の倉谷を去つていった。しのびこむ太陽の強烈さに、私の季節感覚は冬なら春へ、春から夏へと急速に展開していった。かりかえると仙の倉は、さようならと最後の最も美しい乳房に午後の陽をあびてゐた。
(田中美記)

25

滝郷澤左股

中止

6/12

雲取山

時 五月二十八・二十九日

F 平沢勇 鈴木輝夫、山中番佐子

C 三峯口ー白岩小屋ー雲取小屋(オ一日)

雲取小屋ー雲取山頂ースナ坂ー七ツ石小屋ー鴨沢(オ)

新録の山波をカラーフィルムに収めるべく五月下旬の雲取へと足を向ける。写真日和とは云えぬまでも二十八日の朝は希望のもてる天候だつた。三峯口に着いた時にはすでに十一時をまわつてゐた。

雲の彼方に試甲の姿を陰面見る。かた蓮をバスにゆられること十数分、そより善男善女の群れと前後しつつかースル発着所へと参道をたどる。此の山行の目的な写真をとる幸にあつたのでケースルの中で早速カメラマンは気遣ひに移る。

山々はすでに緑こく、山ひたをお、う雲に早くも夏を感じた。三峯神社の山門をくぐり奥深き木立の道をたどる。お版の

26 上越国境縦走

期日 六月十八、十九日

P L 田中英 平次勇 町田明 児里朝規
 装備 天幕(四人) ラジューズー 石油缶、カロン

6月18日(雨、后霧、凡)

土合(五〇七)―山家(五二〇)―六二五―西裏尾根入口(六、
 四七)―六五五)―肩ノ小屋(一〇〇〇)―一三〇〇)―オジカ沢
 頭(一三〇四)―大塚頭(一三〇〇)―大障子小屋(一三〇五
 一三二五)―万太郎山(一四二〇)―一四二〇)―毛沢沢乗越
 小屋(一四五〇)

シヨボノノ降る雨に西裏尾根に道を辿る。森林限界を過ぎると
 西裏沢から吹上げるかすのため視界十米。氷河の跡附近では草の
 露で喉を潤しなから体温の下るのを避けて歩みつつける。一寸し
 た雪渓をトラバースして肩の小屋着十時。雪をこなしして茶をいれ
 ゆっくり美気を養つて出発。カスは拍不反響く。風速十二米位。オ
 ジカ沢頭を越すと上州側から甘米位の風が吹き、霧り水の浸透が激
 しくマツケ着用。カラーフィルムを持った平沢君如何にも口惜し
 そう。大障子の遊離小屋に着いたが体温の低下著しくザンクを下
 さず小憩。ここからいよいよ最大の難所薄太郎山にみかぬ。高差
 二九〇米。衣服は身体に透いつき、涙、汗、頬と水滴は絶えず流
 れ落ちる。谷から吹上げる風にさえ幾度か身体がくらくらついたか。

虫を満足させ本気で歩き始めたのは一時過ぎであった。今日
 日は、「お先に」と声を支してゆっくり進む。見上げる空
 にはいつの向にか雲が広がっていた。

秩父宮記念峠を過ぎつゝま先上りの急な登りを三十分程行く
 と前白岩山に出る。

山の緑はいつ見ても美しい。それぞれの緑の明暗が美しい
 調和をおりなしている。

白岩小屋に着いたのは四時近くであった。更に幾時か見え
 るなぎりの登りに息をはずませ後白岩に立つ。

思わしくない天候を嘆き乍らも雲取小屋に着く迄に埃度か
 シマツターを切った。雲取小屋着五時。

残念な事に宵より降り出した雨はある時は強く小屋の屋根
 を打ちある時は弱々しく辺りの木々をぬらし乍ら一晩中それ
 て明くる二十九日一日中降り続いていたのだった。

二十九日

月ごめて先ず気にかかったのが天候。天候雨は降り続い
 ていた。

カメラマンにとって嘆しいお天気である事はもろくの毒
 カメラマンならぬ私もいささかガツカリしてしまった。ゆっ
 くりと朝食をとり未練気に両足に見入る。一向によくならない。

九時。決心し雨の中に異様な風巻でこぼ出す。二十分の登
 リ。そして雲取の山頂に立つ。凡と雨の吹きつける山頂にカ
 メラをすえ記念撮影を行う。

それで一生涯命に前の人の踏跡を辿る。とやかて霞くだ眼に指
 碑隙が見えぞして頂上。固く喜びの握手を交し、凡下のスツシユ
 の中で、舌もとろける許りのキヤラメルを甜の美味い煙草を焼ら
 して居ると急に晴れて輝陽が指した。この日初めて見た陽の目で
 あり尺一度の陽に照らされた五分向であつた。毛渡沢乗越の小屋
 までの三十分向は亦カスの中。只二五〇米置きに立てられた赤い
 樺木が忽然と現れては消えていった。乗越では凡激しく雨は暮る
 ばかりなので葎鞋小屋の中に天幕を張つた。

(兎里記)

6月19日(雨夜曇)

出発(八・四〇)ーエビス大塚頭(九・三五)ー仙倉山(一〇・二〇)

ー平標小屋(二〇・五〇)ー三國峠(四〇・五〇)ー法師蘆原(五五)

小屋をうつつ霧雨な我々の目を覚ました。四時半である。凡達十
 五米祝界十米凡もかなり激しい。朝食は予定通り六時に摂つたが
 撤収は躊躇した。最悪の場合手渡沢を降りることに決し晴向を待
 った。

八時頃仙倉を望み、又初めて青空を拜したので焚火を決定した。
 出ると直ぐに又カスが昇つて来てしつとりと我々の意気を濡らし
 てしまった。足は快調に渉る。最低鞍部で平標を六軒に出たと
 云ふ二人連に逢つた。

エビス大塚の登りは意外に長くニセ・ピークが多い。この焚火
 路で最も尚忘之のある登りだと書かう。辰笠零、何か目的物を又
 いた様で登高、四人は黙々として踏跡を辿る。小屋なら約二時間
 仙倉に立つた。誰みらくもなく出した手か十字に握手を交した。

草々に山頂を引上げ足早々に稜線を下る。足に気を取られ
 て氣付かなくなつた私の目にふとカラマツの舌芽が雨の中にけ
 ぶつて一層しつとりとした味わいを見せてくれた。今までの
 ふさぎの虫も一べくにこんでしまった。雨の山行も亦楽し
 である。

フナ坂に着く。すべてが雨、々の中に沈んでいる。

ここで思案の未予定を更更し鶴沢に下ることに決定。そし
 てセツ石小屋にてしばしの休息をとる。

二時、セツ石小屋を去りたゞ一途に下る。

今日は雨に明けそして雨に暮れ行く。バスを待ち下り、そ
 れぐの思いを胸に終日共にありし雨に見入る。(山中記)

くわえた煙草も火を巻ける前にビシヨク、にむつてしまふ始末だ。
 早々に退却して高泉状の平標稜線を急いだ。雨こそ小降になつた
 が凡てカスは相変わらず我々の神経を極ます。小屋へは絶道を遡入
 りの道を併せ林帯に入ると直ぐ小屋に出る。ここで沈黙してい
 た学生に気合を入れ我々は朝食を摂つた。乾パン、ソーシサイ
 ターと豪華なものである。雨は止んだ。夜露は雨に洗われた新雪
 の初夏の姿を誇り驚嘆の心を披露する。大塚木は石を捲きしはら
 く登り降りので建売で最後に三國山を右に捲く。地図に記号は無い
 が三國の西斜面はひなりのなれ場である。昔人を想はせる三國峠はその荒れた
 姿が妙に懐しい。香蜂の合衆が割れる様に耳に響く。表裏するこの出来は自然美
 がここに集つているとも云いたい。ジグザグの急降一時向で法師に着く。あま
 りに深く、あまりに静かな法師の温泉である。
 長寿庵で風呂を借りたりした身体にもあのかすのにおいは
 かりは名表の焚火の舌を想わせてはならなかつた。(田中実記)



仙、倉合宿に参加して

渡 辺

亨

長男は山がお好き、などといつ頃のだったか中野君が西高の新聞に書いていたのを思い出す。長男である炭は成程でうなも知れぬなと思つたものである。

中学時代からあの食糧難のそして未だそくなに、山登りの流行していなくなつた頃なら鬼里、町田など灰産に住む僕等の仲間達はよく奥多摩の山々を歩きまわつたものだ。そして今日迄幾度も自分は自分なりの登山やハイキングを楽しんできた。西高の山運中が山岳会を持っているという事は前から幾度も聞いていた。だがその時には特別に入りたいても思わなかつたし又その必要も感じなかつた。

ではなぜ山岳会に入つたのか、それはだんくといふ自分の山行といふものにあきたらなくなつてきたからである。具体的に云うならば自分の登山の仕方とか心構えとかが疑問になつてきたのである。そして町田、松田等のハケ岳登山の話が直接の動機となつて西朋登高会の一會員として名を連ねるに致つた訳である。こんなことを書くとい寸立派に聞えるが実際はいつのまにか入つてしまつたというのが本音かも知れぬ。

さて今度に入会して初めての山行であつたのだからその感想を

書けといふのである。シマッタと思つたかもうおせい、リーダーには絶対服従である。だがその感想も感想になるかどうかは僕の知つたことじゃない。だいたい全く無理な命令などなら。

町田、松田等の話によるとハケ岳では相当にシゴカレらしい。今度の名目が合宿といふのであり予定中にも基礎訓練の何だのとあつたからこいつあてつきりシゴカレルものと思つて覚悟に覚悟していた。これは表向きであつて内心では初めてだから少しは大目にみてくれるだろうという気があつたことも事実である。この予想全く通中し思つたよりもシゴカレずにすんだのは日頃行いの良い人格のしからしむるところであると思つている。

今度の山行に於て特筆すべきことは精神の緊張といふことである。今迄に於て今度ほど真剣に又規律正しく山に登つたことはなかつた。今迄の山行ならば気のむくままに行動していた。従つて楽でもあり楽しくもあつた。これも登山の一つの方法であろう。いやハイキングといふべきかも知れぬ。

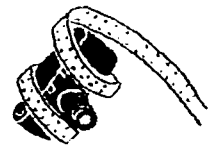
何事も苦しみがなくは上達しない。今迄のようなやり方では何處山に行つても技術的な進歩はみられないだろう。

会の性格ははっきりと僕には分つていない。しかしながらスポ

山の精神に徹するためにその一手段として登山を差込んだという
 ような採言すればスポーツの一分野としての登山はたまた山に
 登るといっただけでなく山に対する認識、登るための技術、それに
 加えて苦難に耐え得る精神力を養わなければならぬのは当然であ
 ろうな最も大切なのはフエアリーな態度であろうと思ふ。

今度の合宿に於て種々の、今迄知らなかつた技術を覚えたのは
 大きな収穫であつた、これはたゞ書物に於て知るといふのでなく
 実際に行いながら覚えるのであるからこんな麗美なことはなく、
 又直ちに役立つのであるからそれは大きな進歩である。そして又
 共同生活を通じてお互いを理解し合ひ、助けあい、これによつて
 お互いを高めあつ、これらのことは個人の登山に於ては求めるこ
 との出来ぬ山岳会の大きな特徴であるように思う。

各人々々、和の精神をもちて登山という共通の目的のため
 に努力していくことその喜びは無限に続くであろう人間完成へ
 の苦しくも又楽しい努力することの喜びに重なるものであること
 を私は信じて疑わない。



山岳写真

随想

松田朝夫

日本人程自然に親しみ、山を愛する国民はない。昔から、信仰
 の場として多くの人に登られて来た山も少なくない。現在とて山
 岳専門雑誌は多種市販され、山岳映画会が盛況を呈しているのも
 日本特有の現象らしい。

私な写真のプロセスを身につけたのは最近の事ではあるが、撮
 影の対称として特に山岳に興味を覚えたのは更に新しい事である。
 それは私が山が好きになつて、近來山に入る事が多くなつてから
 である。よりすばらしい、始められた山の姿を撮らんと日夜夢見
 てはいるのだが、それについて、山行以前の不備々、山行そのま
 の未熟さを今更の様に後悔している。一寸したアルバイトが統
 けば、当抵撮影する気分余裕はなく、カメラの重量をうらむ
 時さえある。しかし、よりすべられたコンディションの到来は、写
 真を撮る者にとってこれ程すばらしい事はない。世の悉ての嬉み
 はどこかへすつ飛んでしまふ。山に入る者ののみが経験する感動、
 その感激は私一人では当抵賈い切れないものがある。その感動と
 いう急峻なピークは、その秀麗な風景を充分に盛ったフィルム面にナ
 ヤージされ、永く豊かに想い出として貯えられるだろう。

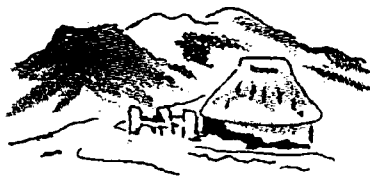
しかし、写真のもつ本来の使命——記録性こそ山岳写真のもつ眞の意義があるのではなからうか。写真——特に山岳写真は、積極的な意味に於いて、自然と日常生活との間にその橋渡しを務めると考えてよい。私たちは世紀の偉業「エクスプレス」の映画を見た。大自然の中で操り放げられるヒューマニティーは、その記録映画によってこそ紹介されたのである。より忠実に描写された山岳写真によって、山岳の実際の姿が理解され、更に進んで啓蒙的意義が充分に發揮されるならば、その記録的価値は更に高まるであらう。この意味に於て、山を撮る者はそれだけで或る義務と責任を感じている。しかしそれも写真を見る者有つての事である。登山は人間あつてのもので、その記録においてもヒューマニティーを欠く事は出来ない。

自然描写——それは山岳写真における本道である。広大な自然の或る一かくをその人の目で如何にトリムし切り取るかによつて、人間的な感動か、云い換えれば芸術味か与えられる。何ら感情を表現しない写真は価値が少ない。湧き上る雲の迫力感、山肌のリリウム、凄味、高度感、重量感など、一枚の写真には色々な感情が表現されるはずである。

最近の山岳写真の一つの傾向として、前景・中景・遠景といった、所謂構成的な写真よりも「面」を強調した写真が多い様だ。航空撮影かそのよい例である。雪山の写真は撮影するにも、その構成というものより、むしろ雪の質感を巧みに表現する事によつてその本当の美しさが表わされている。モノクロームの山岳写真

で印象的なものは多いが、それよりも最近特に目立って来たものに天然色写真がある。これは白黒写真の世界を、更にたく、更に忠実に記録する可能性を与えた。天然色フィルムが比較的安価で、しかもたやすく入手出来る様になった事は、山岳写真を撮る者にとって大きな福音である。色彩は日々研究、改良されている。私達の要求が発展を促すのである。今日、天然色写真が従来の白黒写真のそれとは異つた感銘を与える様になつたのは事実だ。近い将来にはシネ撮影機を購入し、よりエロートに、多角度から登山の實際を撮影して行きたいと思つている。

こうした躍進にあつて、山岳写真を撮る者と志す人々は、より忠実な山の姿をより多くの人々に紹介し、理解して頂く事を念頭において活動したい。如何なる登山隊にも、有能な撮影者を同行させ、より良い記録をもち帰る事によつて、得られる收穫は後々に活かされるならば、誰しもこれを躊躇する理由はあるまい。



会務報告

五月例会 五月十一日(水) 午後六時氷川神社

田中(実)、平沢鈴木成瀬、橋田小田長崎渡辺、町田寛里、山口林(武)、佐藤松田林(春)、龜山山中、伊藤岩崎田中(将)、中野、ゲスト村田

計ニニ名

一、山行報告 仙、倉、新人歓迎会、

二、山行計画 三、その他

●委員会 五月十一日(水)午後十時ボビコラ

田中(将)、田中(実)、平沢、福田(山口、松田、小田)

一、天幕修理の件 ミスライド 三、その他

●対栗根夏山打合せ 六月四日(土)午後六時

田中(将)宅

田中(将)、田中(実)、平沢、西高生京田松田、田辺北村高山

○本年度西高予算四八四五〇円

○本年度春異購入介担左記の通りに決定

西高 夏四人用家庭天幕、冬期四人用

バーバリワイン、パー型天幕、サ

イル三〇米一、ヘアロックマツト

四

西服 ザイル三〇米一、ラジュニスニ、

ニ人用ソエルト(スロード)一

●山誌会 六月八日(水)午後六時田中(将)宅

田中(実)、平沢長崎福田、鈴木成瀬、山口山中、岩崎、伊藤、龜山、佐藤、松田、岩波、母田、小田、米野、町田、林(武)

●委員会リーダー会 六月十一日(土)午後六時半

田中(実)宅

田中(将)、田中(実)、平沢、林(武)

一、夏期山行打合せ 二、集会取次 三、滞納会費

に関する対策(滞納会費は十月までに正常に渡す事、理由なくしてこれに従わざる時は会則才刃茶才之項により除名処分に付す。夏山に必要な春異購入の為、

入月返先払を全量に納得してもらう必要あり) 四、ミスライドは以後パーティの希望異担とする。

●六月例会 六月十五日(水)午後六時氷川神社

田中(実)、長崎平沢、佐藤、町田、松田、渡辺、成瀬、母田、山中、龜山、伊藤、米野、福田、小田、林(春)、林(武)、加藤、山口、田中(将)、西高生、松田(春)、田辺

計22名

一、山行報告 二、山行計画

●五月十一日付左の着入会を許可

林 春彦 昭廿五・三卒

杉並区永福町二五五(32)二〇三ニ

●集会予告

○夏山準備会 7/6 六時 氷川神社 (係田中実)

○リリーター会 7/20 七時 平沢宅

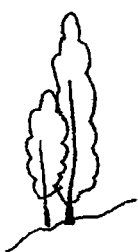
○七月集会 7/23 六時半 氷川神社

○リリーター会 8/7 七時 田中(実)宅 (係福田)

○八月集会 8/28 一時 入主子佐藤宅 (係佐藤)

○委員会 9/7 七時 田中(将)宅

○九月集会 9/17 六時半 氷川神社 (係将利)



LA MORAIN		1955.410—620	
1	22 新人峠迎会 (御岳山)	4.24	林(春)、長崎、田中、田中、平沢、森次、 鈴木、山中、岩崎、福田、龜山、伊藤、佐藤 加藤、小田、米野、西高生9名、他、村田、 高橋(信)、小林
2	穂高尾谷才三尾根	4.29~5.5	田中(将)
3	23 仙ノ倉合宿		田中(実)、平沢、福田、鈴木、中野、長崎、 森次、成瀬、岩崎、佐藤、松田、兎里、渡辺 西高生2名
4	谷川岳	5.15	鈴木、山中
5	鳳凰三山	5.15~16	成瀬、長崎、佐藤、龜山、小田
6	谷川岳	5.22~30	田中(将)
7	24 雲取山	5.28~29	平沢、鈴木、山中
8	谷川岳マチガ沢	6.4~5	福田、林(武)
9	雲取山	6.3~5	林(春)
10	駒七沢	6.11~12	福田、西高生9名
11	新茅ノ沢	6.12	小田、米野
12	26 谷川岳仙ノ倉 激走	6.18~19	田中(実)、平沢、此田、兎里

彌 集 後 記

●真昼の銀座の歩道に、馳やかな夜の新宿に……凡ゆる事物に既に真夏の色が出て来た。残雪の山の報告がやつと出ると云うのに、歳月の流れの早さに今更ながら驚いても始まらぬにしても、季節の山に追われているうちにロマンの華も咲かずに霞が飛び上るのではないかと心配にもなる。

●5・6・7とアルピニズムの再強調はやはりであるが我々もこれを真剣に考える委がある。何事も言行一致。だが何も山へ登る毎に修業だ何だと云っていたら、それこそ本末顛倒と云うべきである。アルピニズムの趣を流れるのはあくまでもフロンティアスピリットである。未知に対する人間のテバカメズム以外の何ものでもない。タラン・ジラス北壁に輝くカストン・レビユファはその「星と汽」の中でこう云っている。「あこがれから人生の大いなる喜びが生まれる。そして種々は常に持たねばならぬ。私は思出よりもそれが好きだ」と。未知の世界に対する憧憬と意志、それの或が近代アルピニズムの骨髄と云ってもよからう。夢……誰だ笑うのは……ゆめほど大切なものはない。一人一人が残らず夢を持ち互に語り合える様な仲間になりたい。その様な意味を持つ会報にしたいと思ふ。

●最近特に感じた事だが、山行と云うものな山での及び行われると思つたら大まちがひである。山行は厳密に云って計画してより後

しまつておけるまでを云う。山行へ行けば行きっぱなしで、借りた装備はそのまま一ヶ月も半年も放置、個人と云わず団体と云わず……そして報告も出さない。確かに学生は社会では大目で見られる、だからと云つてそれを甘受する様であったら馬鹿も大馬鹿だ。てめえのケツもぬぐえないうで大学生でござい面か固いて采れらあね、胸に手を当てて、とっくりと考えて見る事だ。

●この号が貴殿、貴文の所にとどく頃は既に彌集子は夏山の光輝として叙の雲上入だ。では八月の集会まで。(將)

○西朋オ8号は原橋メ切九月一日、発行九月十五日、夏山報告特大号約五十頁の予定。

西朋報告 オ7号

発行日 昭和廿年七月一日

発行者 都立西高OB

西朋登高会

中野区大和町一八〇 甲平方